

# キーラン・ブレナン・ヒントンの *Ordinary Light*

作家名 | キーラン・ブレナン・ヒントン  
展覧会名 | *Ordinary Light*  
会期 | 2022年10月1日（土）－11月10日（木）  
会場 | MAKI Gallery / 天王洲 I, 東京



Keiran Brennan Hinton, *Sunday Chores*, 2022, oil on linen, 137.2 x 106.7 cm

このたびMAKI Galleryでは、カナダ人作家、キーラン・ブレナン・ヒントンによる日本初の個展「*Ordinary Light*」を天王洲Iギャラリースペースにて開催いたします。ブレナン・ヒントンは、自身の日常に寄り添うようにして、季節や一日の時間の中で移り変わる光の質感を18枚のペインティングで表現しています。アジアでの初の展覧会となる本展は、美術館での展示（「I am Here: Home Movies and Everyday Masterpieces」Art Gallery of Ontario, 2022年）、レビュー、北米の著名な雑誌（Forbes、Artnet、Maclean's Magazine、House and Home Magazine）での特集等において称賛を受けた作家にとって、そのキャリアの極めて重要な時期での開催となります。

ブレナン・ヒントンは、写真や記憶を頼りに描くのではなく、生きた風景をそのままに描くプレネール (plein air) \*<sup>1</sup>を実践しています。そのため、何時間も、何日も、何週間も、同じ場所に立ち続け、注意深く観察しては筆を走らせるという作業を繰り返しながら、作品を仕上げていきます。ブレナン・ヒントンのペインティングに対する興味は、影、色、そして知覚といった要素に注がれています。彼を取り巻く環境は、日常生活の中のこれらの要素を表現するための媒体として機能しており、そのため、彼が描いているのは特定の場所であるにもかかわらず、作品には普遍的な親しみやすさを感じられるのです。

\*1 美術においては、狭義では屋外で風景画を描くことを意味し、広義では風景画において戸外の鮮烈な印象を表現することを指す。イギリスのジョン・コンスタブルが先駆者とされるが、1860年頃から印象派の基礎的な実践となり広まった。

ブレナン・ヒントンは繰り返し描くのは、1918年にカナダ、オンタリオ州東部に建てられた校舎とその周辺の風景、そしてトロントにある彼のアパートであり、この二つの場所はここ数年の彼の作品をつなぐ共通項になっています。これらの場面では、家庭の様子や日常生活の平凡さが、私的な描写を通じて表現されています。「Sunday Chores」でアイロン掛けする前の様子が描かれたシャツは、「February Interior」では脱衣後に椅子の上に投げ出された状態で登場します。一週にわたり、物が空間の中で行き交い移動することで、ペインティングは動く絵となるのです。ブレナン・ヒントンは、こうした流動的な瞬間を捉え、絵具によってその瞬間を恒久的に留めるのです。「Afternoon Bath」では、同じ鮮やかなオレンジ色のバスマットが、床の上と浴槽の縁の上とで二度繰り返し登場します。本作品は、日常の当たり前に思われる事象に対して疑問を呈すると同時に、ある空間の中での生活のルーティンを記録しているのです。校舎やアパートの建造物の物理的な頑丈さは、作品の持つ儂げな雰囲気とは対照的に表されています。



Keiran Brennan Hinton  
*Afternoon Bath*  
2022  
Oil on canvas  
137.2 x 106.7 cm



Keiran Brennan Hinton  
*February Interior*  
2022  
Oil on linen  
142.2 x 111.8 cm



展覧会のタイトル「Ordinary Light (日常の光)」は、矛盾に近い言葉です。光が本当に日常的であることなどあり得るのでしょうか？ 非日常的で生命力に溢れながらも、その遍在性ゆえに、光は日常的な美となり得るのです。ブレナン・ヒントンは、シャワーカーテン越しに差し込む光の効果、真夜中の窓を彩る光、そして夕暮れの空の鮮やかな青など、それぞれの絵の中で日々起こる光の現象を追っています。光と影の二項対立は、ブレナン・ヒントンが常に意識していることであり、作品「Sunday Chores」に最もよく表れています。窓から差し込む光は階段の手摺子を通して分断され、サイケデリックなピアノの鍵盤のようにさまざまな色と影となってフローリングの床に降り注ぎます。このような彼の芸術的実践は、歴史上の巨匠たちによる受胎告知図での光の使い方や、ピエール・ボナールやエドゥアール・ヴェイヤールなどの画家からインスピレーションを受けています。ブレナン・ヒントンにとって、日常は感情を揺さぶる可能性を秘めたものなのです。

Written by Tatum Dooley



Keiran Brennan Hinton, *Midnight*, 2022 (detail)



Keiran Brennan Hinton, *January Storm*, 2022 (detail)

### キーラン・ブレナン・ヒントン

1992年オンタリオ州トロント生まれのキーラン・ブレナン・ヒントンは、2014年にプラット・インスティテュートで美術学士号を取得後、2016年にイェール大学にて美術学修士号を取得しています。ブレナン・ヒントンの芸術的実践は、慎み深く穏やかな視点での観察を追求すると同時に、家庭内の親密さの投影や戸外制作の規律、そして内面性といったペインティングの制作プロセスに主な焦点を当てています。限定的な色数から始まる彼の絵画には、作家の日々の暮らしの中に佇むあらゆる色が、光の温度や影の彩度を繊細に整えながら混ぜ合わせられていきます。日常に美しさを見出すという点で、ブレナン・ヒントンが心を奪われるままに主題として切り取る瞬間は、私的でありながらも特定の美術史のレファレンスに深い類似性を持つことが多く見受けられます。しかし、ブレナン・ヒントンの作品は美術教育で学んできた直線的な遠近法や技術的な正確性を優先するのではなく、彼のありのままの感性に基づいているのです。

近年の主な個展に「Between the Woods and Frozen Lake」Nicolas Robert Gallery (トロント、2022年)、「Day Breaks, Night Falls」Galerie Thomas Fuchs (ドイツ、シュトゥットガルト、2021年)、「Towards Sentimentality」Charles Moffett (ニューヨーク、2021年)、「Una Finestra sul Cortile」

Galleria Francesco Pantaleone Arte Contemporanea（イタリア、パレルモ、2019年）などがある他、アメリカやカナダを中心にイタリアでも精力的にグループ展に参加しています。また、2016年には sherry b dessert studio と Katonah Museum of Art の共同コミッションにて、ニューヨーク州チャパクアにパブリックウォールアートを制作しています。



Photo: Rémi Thériault of House of Common Studio

---

MAKI Gallery / 天王洲 I, 東京

---

〒140-0002 東京都品川区東品川1-33-10  
Tel : 03-6810-4850  
Fax : 03-6810-4851  
E-mail : info@makigallery.com  
営業時間 : 11:30 - 19:00  
定休日 : 日曜・月曜

\*本企画に関するお問い合わせは下記までお願い致します。